寂光院じやくくわうゐんは草生村くさぶむらにあり。原弘法大師こうぼうだいしの開基にして、文治の頃建礼門院けんれいもんゐん閑居し給ひしより、今に至り尼寺となる。本

尊地蔵菩薩しやうとくだいしは聖徳太子の御作なり、則門院の御影、阿波内侍あはのないしの像あり、庭にはみぎはの池、みぎはの桜あり。

後白河法皇大原御幸の時

平家物語 池水にみぎはの桜ちりしきて浪の花こそさかり成けれ 後白河院

此辺の垣を緑蘿垣りくらのかきといふ。門院の御墳は後ろ山にあり、これを翠黛山すいたいのやまといふ。不動干石ふどうかんまんせき、石劍いしのけん「ともに弘法の作なり」
鎮守神明宮ちんじゆしんめいぐう「うしろの山にあり、天の岩戸あま いはとといふ岩窟あり。落合おちあひの瀧たきは寂光院じやくくわうゐんの前にあり」

○〔建礼門院けんれいもんゐんと申は、平相国清盛公へいしやうこくきよもりこうの御女にして、十五歳にて女御の宣旨を蒙り、十六にて更衣のくらゐにそなはり、廿二の御時皇子御誕生ある、是を安徳天皇あんとくてんわうと申奉る。平家へいけの一門西海さいかいにて入水の時、やうやう源氏げんじの武士にたすけられ、ふた、び洛みやこへかへり給ひ、初は東山の麓吉田よしたの辺に住せ給ひ、廿九の御時かしらをおろし、さまをかへさせられ、文治元年長月の末に此寂光院じやくくわうゐんへ入らせおはします」

平家物語 思ひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよそに見んとは 建礼門院

此地は常に寂寥として人跡まとをに、洛みやこのつてもすくなく、春は漸軒の梅かほり、庭の若草しげりあひ、青柳の糸風に
もつれ、山藤松にかゝりて花橘匂ふ頃は時鳥音信、秋はいとゞ物淋しく、心のまゝにあれたる籬は、野辺より露しげく、
虫の音鳴つれる折、

かしかまし大原おはらの野の轡虫手綱ひかへて法の声きけ

〔此御詠より此草生村くさうみむらには今もくつは虫鳴ずとなん〕

建
礼
門
院